

---

# 2036年宇宙の旅

ガラクタ・エントツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2036年宇宙の旅

### 【Nコード】

N7345P

### 【作者名】

ガラクタ・エントツ

### 【あらすじ】

21世紀の三つの時代の物語の一つ。『2036年宇宙の旅』宇宙開発が商業的に成り立つようになり、第3次宇宙開発競争が行われている時代。日米合同の宇宙船ディスカバリー号は、高校生を乗せて、外惑星開発の資源調査のため木星の衛星エウロパに向けて出航した。

## 設定

2020年代。

スクラムジェットを搭載した完全再利用可能な宇宙船の開発と低コスト省スペースの二トロケットの実用化により、世界は米ソ冷戦時代に行われ宇宙開発競争に次ぐ、第2次宇宙開発競争の時代に入った。

軌道上に巨大なステーションが開発され、大規模な月面基地などが建設され、運用され始めると、大きな問題が発生し、経済活動が制限されるようになった。

水不足である。

人間に必要な水は、尿などの排泄物から回収可能であるが、推進剤として使われる水素などに関しては回収される見込みはなく、地球から輸送や月面からの採取にはコスト的な限界もあり、宇宙は慢性的な水不足状態に陥った。

そんな時、人々が目に付けたのが、外惑星系の木星の衛星エウロパである。

衛星全体が、厚さ数キロの氷に覆われ、その下には液体の海を持つエウロパから水を持つてくれば、宇宙の水不足は解消される。

人々は、外惑星開発のため、計画を練り始めた。

そこで問題になったのが、木星までの時間である。

最新のイオンエンジンを用いても、往復6年。

6年分の食糧を備蓄することは、それ程問題ではなかった。

最大の問題は、乗組員の精神面での健康だった。

6年もの間、地球を離れることは、誰も経験したことがない出来事である。

2032年、中国連邦共和国は他国に先駆け、有人木星探査船を出航させた。

しかし、2年後、火星と木星の間の小惑星帯で乗員が次々と発狂し、失敗した。

社会的な生き物である人間にとり、長期にわたり、地球から離れ孤立であることに耐えることは非常に困難であった。

そこで、次世代外惑星系探査船に、採用されたのが人工冬眠システムである。

人工冬眠システムを用いることにより、長期にわたり地球から離れ孤立であることに耐える負担は大幅に削減されることが期待された。

2020年後半において、クマヤリスなどの冬眠する哺乳類の研究から開発された人工冬眠システムは実用段階に入っていた。

しかし、今まで、採用されなかったのには、深刻な欠点があったためだ。

医学的・技術的な制約から未成年以外、まともに使用できなかったのだ。

成人が用いた場合、生存確率が50%を切っていた。

それに対して、未成年の生存確率は99.5%と実用に耐えられる水準であった。

21世紀初頭よりも、運用が容易になったとはいえ、知識、技能共に未熟な未成年に、宇宙飛行士をさせることは大きな反発があった。

しかしながら、国家間の熾烈な宇宙開発競争は、未成年の宇宙飛行士を後押しし、実現させた。

当初、否定的だった世論も、中国による人工冬眠搭載の宇宙船計画が、スクープされると僅か1週間で賛成の割合が7割を占めるようになった。

2036年。

17歳ばかりを乗せた宇宙船ディスカバリー号が、2週間後、地球を出発しようとしていた。

## フロリダ ケープカナベラル

二日前に日本を出発し、あと30分も経てば、地球を出発し、6年間は地球に帰ってこれない。

(それにしても、地球で見れる最後の風景がフロリダの湿地帯の風景とは味気ないものだ)

近藤信也は、スペースプレインの小さな窓から見えるただ広大な風景を見て思った。

2036年の時代においても、赤道付近から衛星軌道にあがるのが、一番効率的だという事実は変わらない。

そのため、滑走路を使って離陸するにも、関わらず70年前と変わらず、ケープカナベラルからスペースプレインは離陸していた。赤道付近に行かないといけないということは、宇宙エレベータが実現されたとしても、変わらないのではないだろうか。

今回地球に戻ったのは、宇宙での訓練を終え、出発の前に、友人や知人、親戚一同と別れを告げるためだ。

家族は、政府の計らいにより宇宙ステーションまで、見送りに来てくれることになっているが、さすがに何十人もの人間を呼ぶわけにはいかない。

地球に戻り、小学校時代の友達、選抜宇宙学校時代に出来た友人、田舎の親戚一同と、一週間ほどあいさつに回った。

一度行ったら、6年は帰ってこれない。

死ぬわけではないので、まだ気楽だが、やはり長い。

もつとも、自分は人工冬眠をするので、体感時間としては1年程になる予定だ。

同級生が23歳になる時、自分は18歳（戸籍上は23歳だが）。多くの者は順調に行っていけば社会人になっており、もはや、同じ同級生とは言えないだろう。

まあ、自分も宇宙飛行士という仕事に着くわけで、社会人と言えは社会人だが。

自分だけ、置いていかれた気分になるのではないだろうか。

そして、そもそも、未来において同級生になる今の12歳の子供たちと話が合うのだろうか。

たぶん、合わないだろう。

そんなことを考えていると、出発のアナウンスが流れ始めた。

地球で乗る飛行機は、特別待遇で、寝られるほどのファーストクラスだった。が、スペースプレートの席のサイズは格安航空のエコノミークラスなみだ。

少ないスペースにどれだけ多くの人間を詰められるか、格安航空と同じ発想のもと、大変狭いスペースで立つて乗るという結論になった。

立ち続けるといって大変そうな感じだが、ステーションの軌道までは1時間ほど到着する。そうになると、無重力で座ってようが立ってようが関係ない。ドッキングの時間も含めて2時間もあれば、ステーションには着いてしまう。

非常に合理的だ。これにより、運賃を30%も節約できるそうだ。

スペースプレーンが動き始め、退屈な風景が変わり始めた。

離陸すると、速度はそれほど上がらないが、どんどん高度を上げていく。

アメリカン航空が所有するボーイングS203は、2段式で、1段目の大型の高速ジェット機の背中に宇宙機を乗せて飛行機のように

に離陸する。スクラムジェットを用いて高度3万mまで上昇すると、自分たちが載る宇宙機は離脱、二トロケットエンジンで大気圏を脱出し、1段目は地上に帰還する。

高度1万メートル程に達すると、飛行機は速度を上げ始める。空気がありすぎると摩擦抵抗とその熱により速度を上げることが難しくためだ。

高度3万メートルで、マッハ1.2程になると、宇宙機を分離する。このあたりになると、空は既に青くなくなり、宇宙に近いことを実感する。

宇宙機は分離すると、ロケットエンジンにより、ステーションのある低軌道まで上昇する。

低軌道に到達するまで、わずか1時間。東京からフロリダまで乗り継ぎこみで8時間もかかるのに、宇宙に行く方が早い何て不思議な気がする。

低軌道に到達してから、ロナルド・レーガン宇宙港にドッキングし入れるようになるまで、だいたい1時間かかる。

その間は、窓から、めまぐるしく変わる地球の風景を眺めたり、CAが持ってくるコーヒを飲みながら時間をつぶす。

これは不思議と何度体験しても飽きがない。

そうこうしていると、ロナルド・レーガン宇宙港が見えてきた。予定では、出発の日までは、ここで体調管理やマスメディア対応をすることになっていた。

ロナルド・レーガン宇宙港は、20世紀後半におけるもっとも偉大な大統領ロナルド・レーガンから名づけられたアメリカ合衆国最

大のドーナツ型総重量40万トンの大型宇宙ステーションだ。

港湾機能以外にも、工場、研究所としての機能や街として機能も持っており、年間200万人もの人が行き来している。

つい20年前までは、400トン程度の国際宇宙ステーション（ISS）が世界最大だったことを考えると、この10数年の宇宙開発のスピードの速さは、まさに驚異的だ。

## ディスカバリー号と神舟2号

2032年、中国連邦共和国は他国に先駆け、有人木星探査船、神舟を出航させた。

このことは、アメリカ合衆国にとって、1957年のスプートニクショック以来の大きな衝撃であった。

この衝撃は大きく、当初、NASA内において、スカンクワークだった外宇宙開発計画ジュピターに10兆円もの予算を与えた。

しかし、当時の時点は、中国がアメリカを大きくリードしていることは間違いなかった。

だが、アメリカにとって幸運なことに、そして中国にとっては不幸なことに、2年後、火星と木星の間の小惑星帯で神舟の乗員が次々と発狂し、計画は中断した。

このことは、アメリカ合衆国とその同盟国である日本に対して、安堵と対応する時間を与えた。

そして、わずか4年の間で、ディスカバリー号を建造し、出航させるまでに至った。

一方、中国も諦めることなく、神舟2号を計画していた。しかしながら、出航日はディスカバリー号の出航から2週間後、宇宙船の足の速さを考えると、有人宇宙船木星到達の栄誉は、アポロ計画に続きアメリカに与えられる公算が大きかった。

ディスカバリー号の名前の由来は、かの有名なSFの名作『2001年宇宙の旅』に出てくる有人宇宙船『ディスカバリー号』から取ったものだ。

スペースシャトルに、『2001年宇宙の旅』の『ディスカバリ

1号』、『スタートレック』の『エンタープライズ号』とSF作品からの名前を付けるアメリカ人の趣味を強く現したものだ。

しかしながら、『ディスカバリー号』に与えられたミッションは、『2001年宇宙の旅』とは大きく異なる。

モノリスの調査など夢のある内容ではなく、人類初の外惑星有人飛行にも関わらず、木星の衛星エウロパの資源調査・採掘・輸送のテストという商業要素が大きいものとなっている。

これは、一番乗りや研究を目的とした過去の有人飛行とは大きく異なっていた。

そのため、宇宙船の設計自体も大きく異なっている。

衛星エウロパでの資源採掘と輸送を行う必要性から、乗員は18名と多く、採掘機械や輸送設備を乗せる都合から船体も巨大な物となった。

全長200メートル。

その姿は、滑らかさや美しさとは程遠いものであった。

構造材に必要なものを付けただけという見た目。それゆえに、短期間で造船できたとも言える。

宇宙で造船され、宇宙のみで運用されるディスカバリー号は、空気抵抗を考える必要がなく、そのため滑らかにする必要はない。

スペースデブリ対策から、それなりに覆いをしているが、その必要がなければ、むき出しだっただろう。

船首は、操舵室と居住区。中央部は、採掘機械や輸送設備を乗せるエリア。帰路には、エウロパで採掘した水に乗せられるよう、風船のように膨らむタンクが備え付けられていた。そして、船尾は機関部であり、エネルギー源となる小型核融合炉と推進剤用タンク、イオンエンジンが配置されていた。

神舟とディスカバリー号の最大の違いは、搭載されているコンピュータシステムだ。

ディスカバリー号には、映画と同様に、『HAL』と呼ばれる人間に匹敵する知性を持った人工知能システムが搭載されていた。

このHALシステムが搭載されているが故に、ディスカバリー号という名前に拘ったとも言える。

『HAL』は、IBMのハードウェアとGOOGLEで開発されたソフトで構成された、世界で最初に会話において人間と同等であることが認められた人工知能システムだ。

過去に、チェスや将棋、囲碁など一部のゲームや専門分野において、人間の知能を上回る人工知能は存在していたが、会話においては長い間、3歳の子供レベルにすら到達していなかった。

しかしながら、インターネットや画像認識技術、スカイプなどを利用した人工知能の発展により、2020年代から人工知能は会話分野において急速に進歩し、2030年には人間に匹敵するようになった。

『HAL』という保護者の開発に成功したことが、未成年だけによる宇宙飛行をアメリカや日本において可能にしたと言っても過言ではない。

## 出航と第一回目の目覚め

2036年1月14日0時。

ディスカバリー号は、宇宙ドック「ノースフォーク」から静かに出航した。

20世紀の宇宙船に慣れた人間から見れば、迫力に欠けた奇妙な出発だっただろう。

昔からテレビで流されている劫火と爆音を伴うロケットの発射に見なれた多くの人々は、劫火と爆音がないため失敗したと思いこみ、大騒ぎしたらしい。

特に、テレビ局内に、科学知識がある人が居ない日本のテレビ局は、失敗との誤報を流したそうだ。

母国ながら頭が痛い出来事だ。

木星に到達するためには、地球から出発する時のような急速な加速は必要ない。

時間をかけて、ゆっくり加速すれば良い。

イオンエンジンは、化学ロケットと異なり、短時間に大きな力を出すには向いていない。

しかしながら、少量の推進剤を使い、長時間加速し続けるには向いている。

そのため、長距離宇宙船のほとんどは、イオンエンジン推進だ。

そして、ディスカバリー号のイオンエンジンは、世界最大出力・最新鋭のイオンエンジンだ。

それでも、最大出力で軽自動車程度の出力しかないのだが、NEC製で4万時間稼働させても、故障率が0.1%の優れたものだ。

さすが落ちぶれても日本製。

故障率が10%を超えるという噂の中国製とは品質が違う。

デイスカバリー号は、今後一カ月程、飛行テストを兼ねて地球を回りながら、徐々に加速していき、外宇宙へと飛び立っていく。

出航した際、家族全員が見送りに来てくれたらしいが、残念ながら覚えていない。

なぜなら、人工冬眠で寝ていたためだ。

人工冬眠をするためには、食事制限など最低でも1週間の準備をすることが好ましい。

そのため、出航してから人工冬眠するのではなく、人工冬眠をした状態で船に運ばれた。

そして、自分の番が回ってくるまで、目覚めることはない。

デイスカバリー号の乗員は、18人。1チーム3人で、合計6チームが交代制で船を運航する。

人工冬眠は、一年以上連続で行うことは健康上の都合で、制限されているため、少なくとも1年に1回は起こされることになっている。

6チームなので、だいたい2か月ごとの交代だ。

俺が所属しているのは、第6チーム、名前は「スカイラク」だ。構成は、女性が2人に男は俺1人。

まさにブチハーレムといったところだ。

デイスカバリー号全体では、男性8人、女性10人であるため、俺は恵まれているとも言える。

しかも、1人は可愛らしく、もう1人は知的な金髪美人だ。

可愛い方は、小野寺瞳、日本人だ。

知的な美人は、アメリカ人で、リナ・パープルトン。

2人とも、知的で魅力的なのだが・・・性格は・・・

正直、キツイ。

かなり自己主張が強い。特にアメリカ人のリナの自己主張の強さは半端じゃない。

なんでも、結構なお嬢様だそうだ。

お嬢様なら、地上で遊んでいれば良いのに、わざわざ物がない宇宙に行く気がしれなかった。

そんな彼女と相性テストのため1ヶ月間程、一緒に過ごしたが、正直かなり疲れた。

落第したくないため、表面上はお互い取り繕ったが、そのストレスはかなり大きかった。

それでも、他の落第したチームよりはマシだったらしい。

3人で過ごすわけだから、喧嘩せず穏やかに過ごしたいものだ。

近藤信也が所属していたチームは6番目のチームだったため、近藤信也が目覚めた時、既に出航から10カ月が経過していた。

目覚めた時の感覚は、爽やかな目覚めではなかった。

寝すぎて、頭が痛くなった時のような感じだ。

何よりも、体がだるい。

「HELLO SHINYA。気分は、いかがですか」

目覚めたとき、最初に声をかけてくれたのは、HALだった。

HALの声は、乗員を落ち着かせるために、20代の女性の声に設定されていた。

人気の声優さんで、街のあちらこちらで聞くことが出来る。

なんでも、声の使用料だけで億単位の金が入るらしい。

羨ましい限りだ。

「テストの時と変わらないな。ちょっと体がダルイくらいだ」  
「体を動かさないでください。今から、原田さんがケアに行きます」

人工冬眠から目覚めた直後に、直ぐにシフトに着くようなことはない。

体力や判断力が低下しているため、2・3日間、リハビリや身体チェックの時間が設けられている。

最初に話をした人間は、5番目のチームの原田優奈さんだった。  
才色兼備性格も良いクオータの美少女だ。

丁寧に全身に付けられたチューブやセンサーを外してくれる。  
彼女が、面倒を見てくれるだけで体が楽になった気がする。

各チームには必ず1人は、女性が配置されている。  
理由は、異性が居ることにより、情緒が男女共に安定するためだ。  
もう一つは、男性は女性にケアされるのを喜ぶが、女性は男性にケアされるのを喜ばないためだ。

30代ぐらいになれば割り切れるのだが、思春期の人間の扱いは、  
男女、アメリカ・日本を問わず面倒なものだ。

「終わりました。でも、しばらくの間は立たないで横になって  
くださいね」

そして、最後に優しい笑顔。

小野寺が言うには、最高の癒し系らしい。

さらに、料理もできるらしくお嫁さんにもらうなら絶対原田さん  
だと言っていた。

同性に言われるなら大したものだ。

そんなパーフェクトな原田さんだが、レスなので男の出番はない。  
悲しい現実だ。

## 出航と第一回目の目覚め（後書き）

月一回程度のペースです。それにしても「小説を読もう」でSFを読む人がいるのだろうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7345p/>

---

2036年宇宙の旅

2011年1月10日23時55分発行